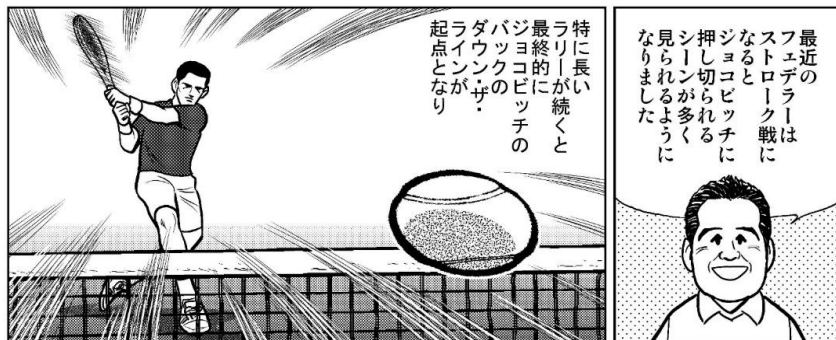
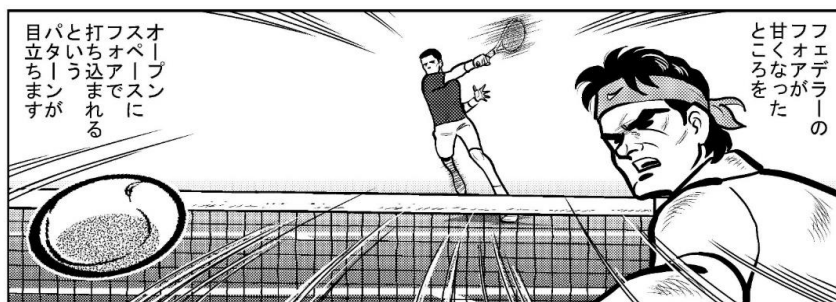


ネットブレイクの法則

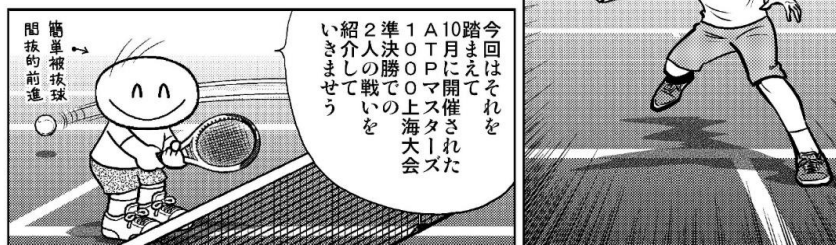
監修/辻野隆三(MIRAI TENNIS ACADEMY) 作画/石川正順



最近のフェデラーはストロークになるとジョコビッチに押し切られるシーンが多く見られます

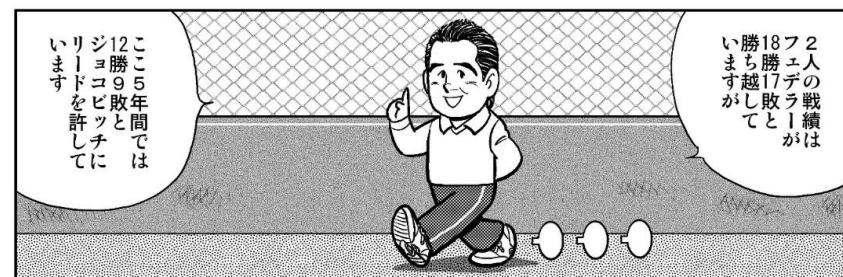


それに対しフェデラーはネットブレイクを増やして対抗



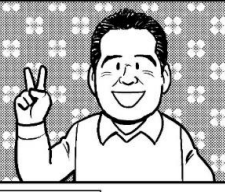
N. ジョコビッチ
 1987年5月22日生まれ(27歳)
 身長188cm/体重80kg
 ユーゴスラビア・ベオグラード出身
 対戦時のランキング1位

R. フェデラー
 1981年8月8日生まれ(33歳)
 身長185cm/体重85kg
 スイス・バーゼル出身
 対戦時のランキング3位



Point ①

この試合はフェデラーはこれまでの負けパターンを克服するために方法をとってました

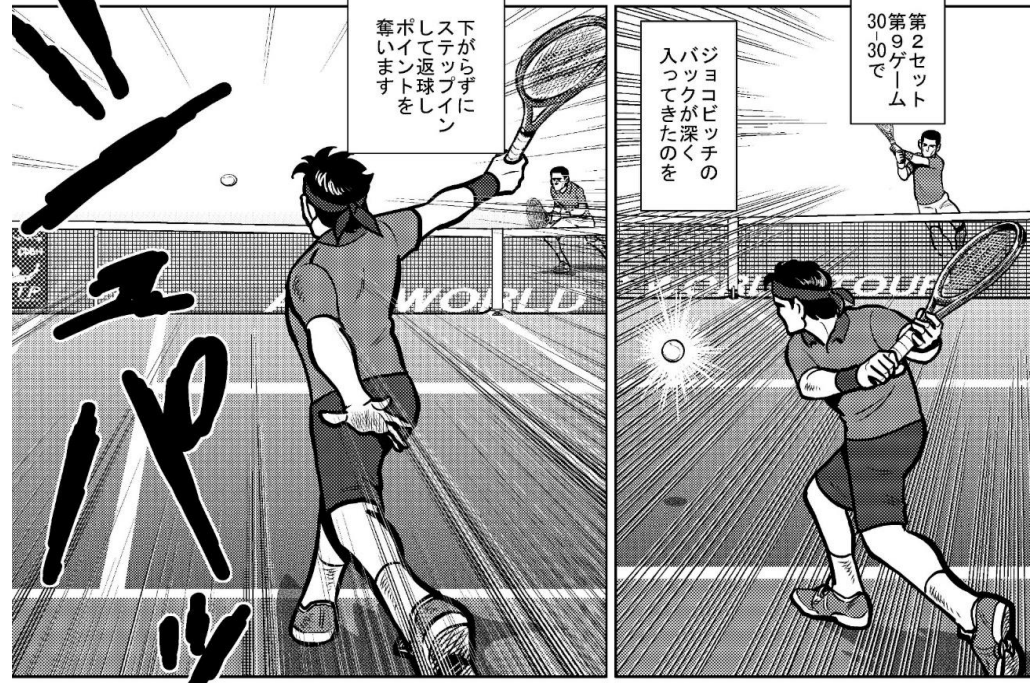


それはバックでポジションを下げない「サーブ」の「プレースメント」を上げるんです

第2セット第9ゲームで

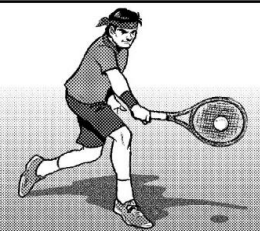
ジョコビッチの入ってきたのを

下からステツプインして返球しポイントを取ります



エース

フェデラーがバックから打つ時



50cm ↓

ステツプインした右足がより50cm以上離れるとミスが増えるというデータがあります

ここでこの試合は差が広がらないようにバックハンドからほとんど打つていました



またフェデラーは阻止率が60%を切ると負けることが多いというデータもあります

ブレックポイントを逃れるために大切なのは速いサーブでエースを取ることではなく

いかに自分が狙った所にサーブをコントロールしていくかなのです



第1セット第8ゲームでは



センターへ

ワイドへと

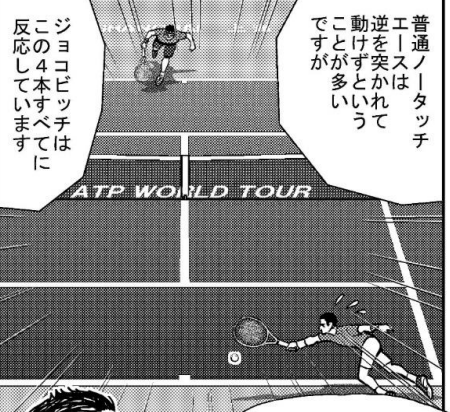


実に4本連続でエース!

普通ノータッチエースは逆さかき動けずということが多い

ジョコビッチはこの4本すべてに反応していません

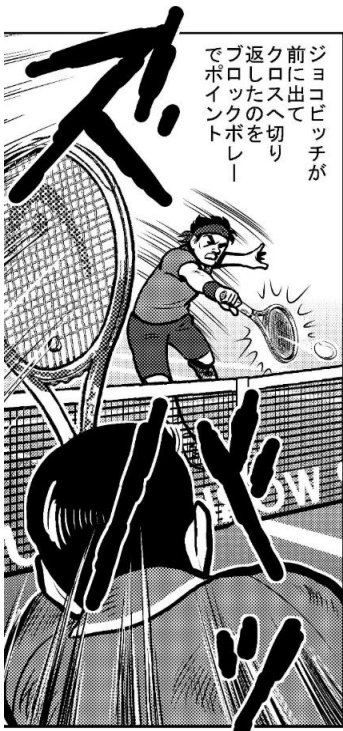
このポジションを下げないバックハンドとサーブコントロールでフェデラーは主導権を握り



届かなくてもかわらなかつたサーブの威力がすごいですね



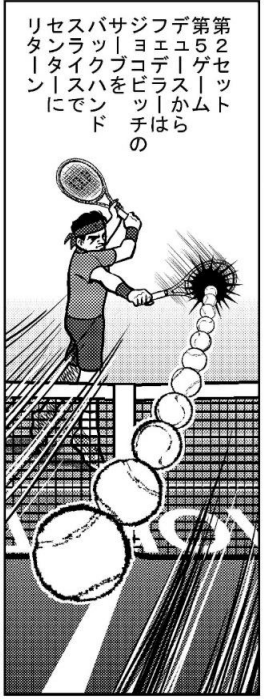
ネットプレーを駆使して試合を有利にする



ジョコビッチが前に出てクロスへ切り返したのをバックボレーでポイント



そこから前に詰め短めにバックボレー

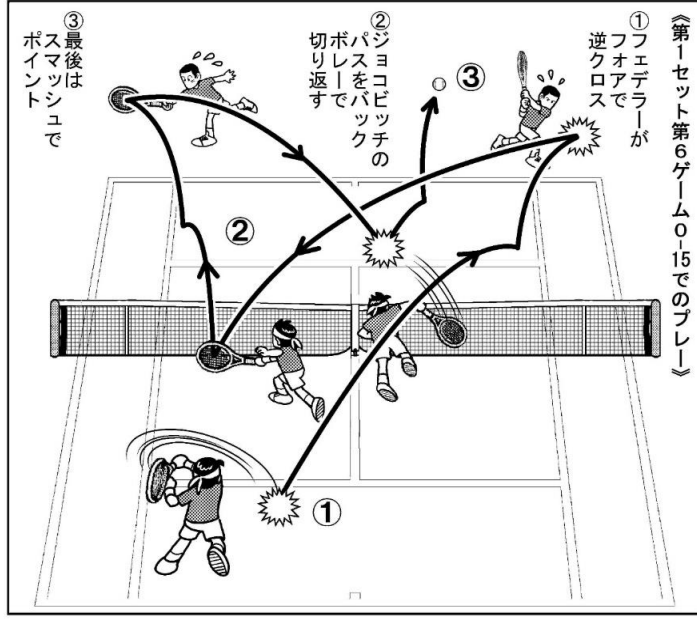


第2セット第5ゲームからフェデラーはジョコビッチのバックハンドをリターンに



Point ③

そしてもう一つの作戦が「相手のパスの角度をつかす」でした



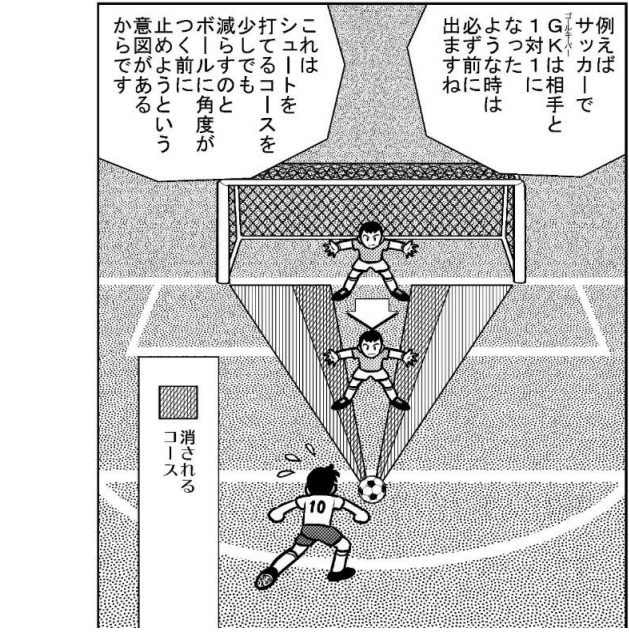
Point ②

フェデラーがネットに出るためにとった作戦が「回り込みフォアを逆クロスに角度をつけて打つ」というものです



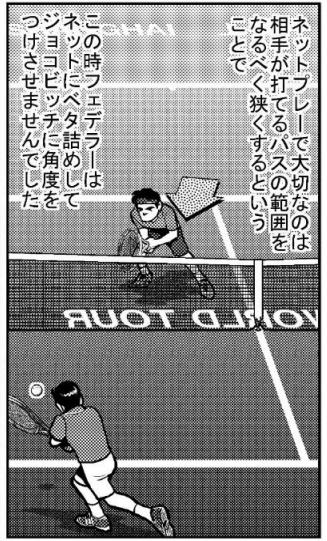
《第1セット第6ゲーム0-15でのプレー》

①フェデラーがフォアで逆クロス
②ジョコビッチのパスをバックで切り返す
③最後にスマッシュでポイント



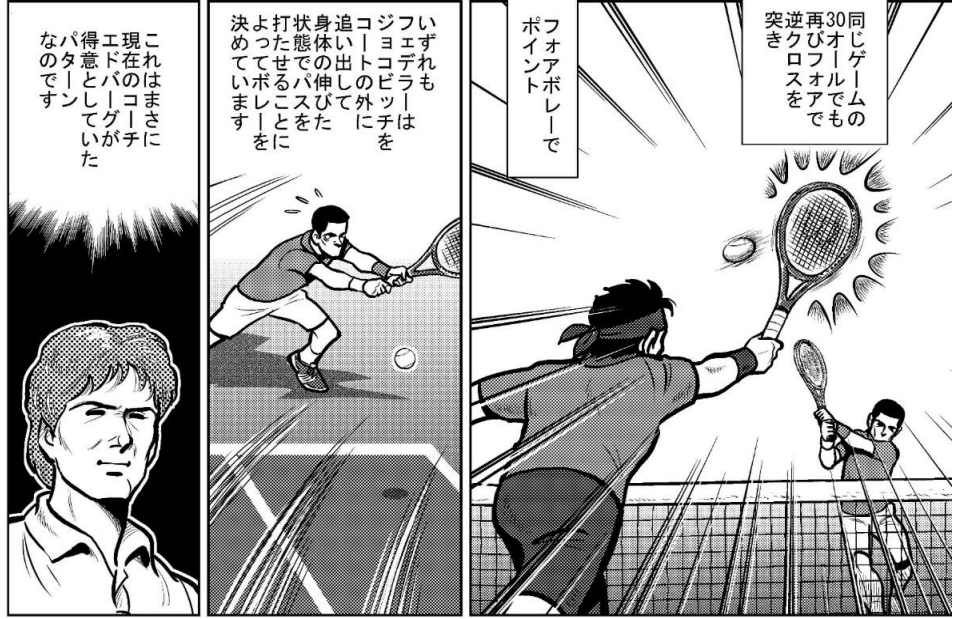
これはコートコースを打てるコースを少し減らすのとバックボレーの角度が止るという意図があるからです

例えばGKは相手と1対1になった時は必ず前には出ますね



この時フェデラーはネットにベタ詰めしてジョコビッチに角度をつかせませんでした

ネットプレーで大切なのは相手が打てるパスの範囲をなるべく狭くすること



これはまさに現在のコーチが得意としているパターンです

フェデラーはジョコビッチの外に出た時に追いついてパスを打たせておいて、決めておいて

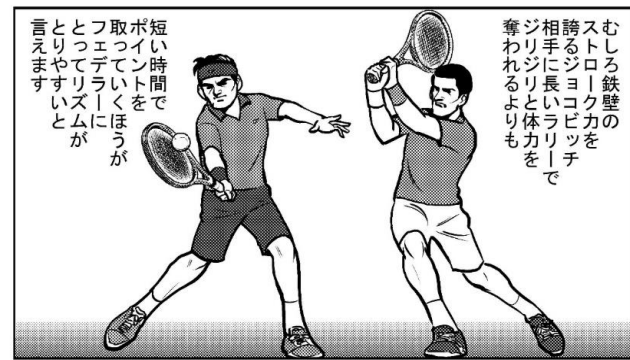
フォアボレーでポイント

逆クロスでも30ゲームの再フォアを突きの

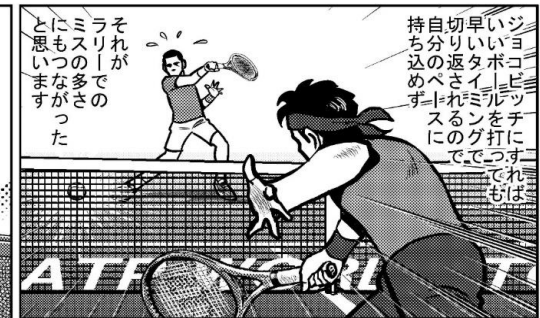
6-4
6-4
フェデラー
ストレート
勝ち



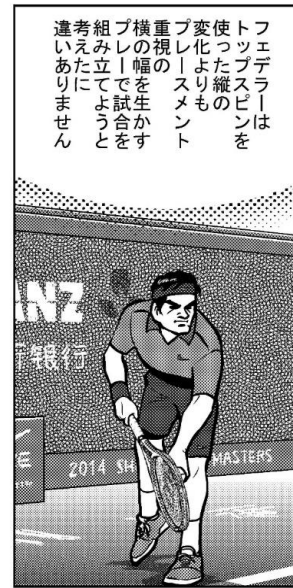
33歳になったフェデラーがサーブ&ボレーやネットプレーなど激しい動きをするのは体面でのリスクを伴うのではという意見もあるかもしれませんが



むしろ鉄壁のストローク力を誇るジョコビッチで相手に長いラリーでギリギリと体力を奪われるよりも短い時間でポイントを取っていくほうがフェデラーにとりやすいと言えます



ジョコビッチに打つては早いタイムリングで自分のペースに持ち込めず



フェデラーはトップスピンを使った縦の変化よりもブレースメント重視の幅を生かすプレーで試合を組み立てようと考へていません



ネットプレーがもう一つの要因がこの大会のサーブ&ボレーがあまり跳ねないコートだったという点にあります



プロ選手はサーブ&ボレーに合った戦術を考えて戦います

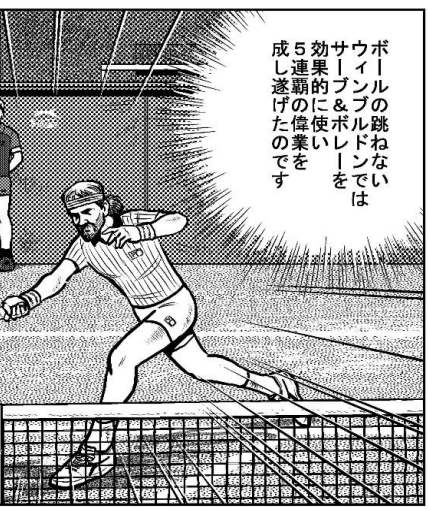


例えば70年代後半から80年代前半にかけて大活躍したあのボルグは

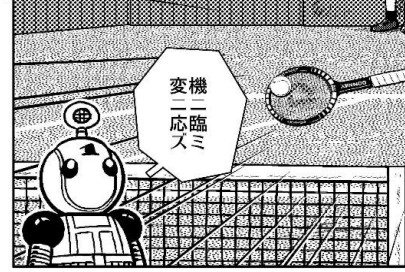


基本的にベースラインプレーヤーでしたが

日・ボルグ
1956年6月6日
スウェーデン出身
全仏6勝
ウィンブルドン5連覇を含む
四大大会通算11勝
強烈なトップスピンのフォアハンドと両手打ちバックとハンドを武器とし近代テニスの嚆矢となった



ボールの跳ねないサーブ&ボレーでは効果的に使えない5連覇の偉業を成し遂げたのです



変機ニ応ミ



今日のポイント
①負けパターンを分析し対策を立てる
②アプローチの基本は逆クロス
③バスのうまぬ相手にはセクターセオリー
④跳ねぬサーブ&ボレーでは横幅を使え